

書評

タンザニアの「一人親方」たち

福田幸正
客員研究員
(公財) 国際通貨研究所

小林さやか、2016年、『「その日暮らし」の人類学、もう一つの資本主義経済』、光文社

本書の要点は、次の通り出版元の光文社の紹介文が要領よくまとめている。

「わたしたちはしばしば、「働かない」ことに強くあこがれながらも、計画的にムダをなくし、成果を追い求め、今を犠牲にしてひたすらゴールを目指す。しかし世界に目を向ければ、そうした成果主義、資本主義とは異なる価値観で、人びとが豊かに生きている社会や経済がたくさんあることに気づく。「貧しさ」がないアマゾンの先住民、気軽に仕事を転々とするアフリカ都市民、海賊行為が切り開く新しい経済・社会……。本書では「その日暮らし、Living for Today」を人類学的に追究し、働き方、人とのつながり、時間の価値を含めた私たちの生き方、経済、社会のしくみを問い直す。」

本書について、以下の通り私見と共にご紹介させていただきたい。

著者は新進の文化人類学者。アフリカ研究を専門とし、アフリカの人々のインフォーマルな生存戦略「その日暮らし」の研究をテーマにしている。そのために、タンザニアでは現地の行商人に交じって古着屋などを実践。はたまた彼らについて中国にまで買い付けに行ってしまう。フィールドワークとはいえ、その行動力には舌を巻いてしまう。現地の人の中に溶け込めることは、文化人類学者としての重要な資質だろうが、ここまでこともなげに軽々と行動できることには感心するばかりだ。彼女のような新種の文化人類学者が今後続々と出てくるのだろうか。そうだとすれば日本の文化人類学の将来はとも楽しみだ。

一見、行き当たりばつたりのように見えていても、それなりに合理的な行動をとっている「その日暮らし」のタンザニア人。一人だけ皆を出し抜いていい思いをしようとするのではなく、人間関係を利用し、また、利用されながら、皆でなんとか生き抜こうとしている。そんな生活に安定はなく、常に流動的。リスクも高い。それでも人々は広範な人間関係の中で実に生き活きと生活を営んでいる。正規雇用は稀。したがって多くは自営業だ。自営業と言えば聞こえは良いが、要は何かしていなければ生きていけないだけの話だ。そこには、貧困に打ちひしがれた姿はなく、自助努力そのものの生活がある。

自分のカイロ駐在時代に、ある方からいただいた、片倉もところ著（1995）『移動文化考 イスラームの世界をたずねて』（岩波書店）というアラビア遊牧民の生活規範を書いた本を思い出した。日本では一所懸命といわれるように、職場でもなんでも一カ所に留まり続けることがなによりも大事とされてきた。一方、アラブ人は移動することにこそ人

生の価値を置いてきた、という内容だった。『移動文化考』が出版されたのは日本ではバブルが崩壊し、それまでの極端な目的志向型の社会のあり方に疑問が呈された時期でもあった。そしてアラブ人の移動を楽しむ生き方の中に、ゆとりとくつろぎがあるとし、「ゆとりぎ」という造語を紹介しながら、日本人のこれまでの一所懸命な生き方に反省を促す内容だった。

『移動文化考』と『「その日暮らし」の人類学』は内容的に共通するものがある。つまり、途上国にある人間的な生き方や能力を発掘し、日本が陥っている閉塞状態を打開するための示唆を得られないか、日本人の生き方を改革できないか、といった視点だ。社会情勢も不安という点で共通している。つまり前者は日本経済が一所懸命突き進んだ結果のバブルの崩壊から来た不安。後者は非正規雇用が労働人口の三割を超えるなど、雇用の不安だ。本著では、アフリカの例ではあるが、非正規雇用でも明るく前向きに生きていくことができる、という点に注目が集まったのだろう。つまり人に使われるだけが人生ではない。自分の創意工夫で小規模ビジネスを展開するのは高リスクだが高成長も期待できる。正式雇用が無理なら自営という道がある、という起業の勧めだ。これは最近の「多様な働き方」の議論とも重なる。

しかし、現実には起業でき、そしてそこそこやっつけていける人は限られるだろう。そもそも先進国では途上国のようなインフォーマルなスペースは限られており、そう気軽に誰でも起業できるというものではない。正規雇用も起業もままならないとなると、どうなるか。文字通り「その日暮らし」を強いられることになる。そしてその延長線上にあるのはアナキズムかもしれない。しかし、それは豊かな国ならでのこと。途上国ではそんな高邁なことは言っていられない。

本著は様々な視点から注目を集めているのだろうが、これから日本が良い方向に向かってゆく一つの兆しとしてとらえたい。